

平成 21 年 5 月 21 日現在

研究種目： 基盤研究（C）
 研究期間： 2006～2008
 課題番号： 18530505
 研究課題名（和文） 学校心理学の基礎理論の再構築—寄せ集めでない我が国独自の
 体系は作れるのか？—
 研究課題名（英文） Reconstruction of the basic theory on School psychology

研究代表者
 鎌原 雅彦 (KAMBARA MASAHIKO)
 千葉大学・教育学部・教授
 研究者番号： 90169805

研究成果の概要：

現職教師・学校心理士の学校心理学の知識構造及びニーズを調査し、さらに学校心理学を提供する側である大学教員を対象に学校心理学に対する認識の調査を行い分析した。学校心理士の知識構造は、課題中心的であるが、その基礎となる知識の危うさと必要性の認識が示唆され、基礎理論の裏づけの重要性が示された。学校心理学の知識の情報源として依然として教職課程での授業の役割の大きさが示された。学校心理学を提供する側の学校心理士資格を持つ大学教員は、現職教師・学校心理士のニーズに対応しようとすると同時に相対的に基礎理論を重視していた。しかし重視する側面について、教育心理学系を中心とするものと臨床心理学系を中心とするものとの相違もみられた。近年の文献の分析を踏まえその方向性について議論した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	630,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：教育系心理学・学校心理学

1. 研究開始当初の背景

近年、学校を取り巻く諸問題への関心の高まりの中から教育心理学のなかでもとくに学校に関連した領域を学校心理学と呼び独立した分野として捉えようという流れが形成されつつある。我が国でも学校心理学の名称を冠した学部や大学院のコースが設置されてきており、学校心理学に関する専門書が出版されはじめている。しかしながら現在の我が国の学校心理学は、必ずしも独自の体系を持たない寄せ集めのものに止まってい

るのではないかと考えられる。そこで、我が国の学校心理学の実践者への調査などを通して我が国の学校心理学の現状とあるべき姿を検討する必要があると考えられる。

2. 研究の目的

欧米の文献の収集、欧米の学校心理学において心理学的な基礎理論としてどのようなものが取り上げられているかを分析する。

次に現職教員・学校心理士等現場での学校心理学実践者に対して、学校心理学の知識や、

実践現場で直面する諸問題を調査し、我が国における学校心理学の現状とニーズを把握する。

さらに、学校心理学を提供する側の学校心理士資格を持つ大学教員を対象に学校心理学のあるべき姿に対する認識を調査し、学校心理学の理論的基礎づけの再構築の可能性を探ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 学校心理学先進国である米国の文献での心理学基礎理論の扱いを調査するため、Journal of School Psychology 誌の1986年24巻から2005年43巻まで20年分を対象に、キーワードを抽出した。抽出したキーワードは5年分(5巻)を1つの区切りとし4つのパートに分けて集計した。キーワードが複数の単語から構成された熟語となっているものが多いため、適宜カテゴリー分けし、一つのキーワードとして分類し集計した。

(2) 学校心理学に関する知識、ニーズ、知識の情報源等を調査するため、学校心理士会、認定講習等において調査を実施し、一般教員69名、養護教諭92名、学校心理士59名、計220名から回答を得た。知識については、学校心理士資格認定委員会「学校心理学ガイドブック」を参考に、学校心理学、教育心理学、発達心理学、臨床心理学、障害児の教育と心理、生徒指導・進路指導、教育評価・心理検査の各領域にわたり、幅広く一般的用語として43の用語を選択し、理解度、有用度を調査した。さらに教育現場での問題の対処に必要な学校心理学的知識のニーズ、また学校心理学に関する知識、情報をどのようにして入手しているかについて調査した。

(3) 現職教員が現在の勤務校において直面している問題のうち、特に教育心理学等の専門的な支援が必要と考えられる問題とはどのようなものかについて調査するため、現職教員を対象に調査を実施し、192名から回答を得た。①現在の勤務校で直面している児童・生徒の適応上の問題(教育相談等を含む)②現在の勤務校で直面している、学習指導、学級経営などの問題、あるいは教師自身の問題の中で、教育心理学等の専門的な支援が必要と思われるような事柄について自由記述を求めた。

(4) 学校心理学を提供する側である学校心理士資格を有する大学教員は、学校心理学をどのように捉えているのか、また学校心理学に対するに大学教員考え方には、どのような相違がみられるのか、について検討するため、学会連合資格「学校心理士」認定運営機構発

行、学校心理士名簿2006年度に記載された学校心理士のうち所属・職名の欄の記載内容から大学専任教員等、大学を主たる勤務先としていると判断された者453名に対し郵送調査を実施し、129名からの回答を得た。属性の他、学校心理学のさまざまなテーマについてどの程度重視するか、また学校心理学の在り方や支援の側面等について調査した。

(5) 近年の学校心理学の研究動向を探るため、米国の学校心理学に関する辞典、ハンドブックの項目を分析した。

4. 研究成果

(1) 1986年から1995年の10年間でもっとも頻度が多かったキーワードはintelligence / intelligence testing などであり、1996年から2005年の10年間はachievement などであった。アメリカの学校心理学がいわゆる軽度発達障害の児童・生徒の知能のアセスメントを一つの軸として発展し、近年はその発展としての達成研究などに中心が移っていることがうかがわれた。また、school psychology あるいは、school psychologist など上位を占めており、学校心理学のありかたなどについては、この領域の先進国アメリカでも依然として、議論になっていることが伺えた。

(2) 学校心理学の用語の理解度の分析から、教員・学校心理士の知識構造は、用語を選出する母体となった学校心理学のそれぞれの領域を反映するものではなく、教員や学校心理士が直面している課題を軸に構成されていると捉えることができた。例えば、発達段階は発達心理学の領域から、知能検査は教育評価・心理検査の領域からとった用語であるが、これらは発達上の障害を考える視点から捉えられていた。逆にいえば、発達心理学の領域の用語は、発達障害の課題や、青年期の問題、あるいは学習の問題等の構造に散在していた。同じように心理的問題に対する対応としての心理療法的事項も臨床心理学的領域としてまとまるのではなく、これらが用いられる課題との関連から理解されていると考えられた。このことは現在の学校心理学が既存の心理学諸領域の寄せ集めて的なものにとどまっていることの間接的な証左ともいえる。

教員・学校心理士の知識構造は課題志向的であったが、例えば、「行動療法」とその理論的な基盤である「古典的条件づけ」や「強化子」を比較すると、前者の行動療法の理解度に対し、後者のそれはかなり低くなっており「言葉は知っている」の水準以下であった。実践的事項の理解を支える基礎的事項の知識の危うさが示唆された。しかし

同時に、例えば「強化子」は、その理解度から予測されるよりは、役立ったという認知が高くなっており、こうした基礎的事項を理解することの必要性もまた認識されていることが示唆された。

学校心理学に関する知識等の情報源としては、研修の役割が大きかったが、学生時代の授業も次いで選択率が高く、教職課程における教育心理学、学校心理学の授業の役割が依然として大きいことが確認された。

学校心理学の知識としてとくに詳しく内容を知りたいと思っている事項としては、発達障害とその対応、⑩ストレスやそれにかかわる心理的問題、⑨精神病・神経症などの心の病気に関する知識などが多く選択された。またどのような知識を欲しているかの相違によって、発達障害とその対応、心理検査・査定法、精神病・神経症など臨床心理学的知識を中心とする群、発達障害とその対応の他、学習と記憶のしくみ、動機づけ（意欲）のメカニズムなど、学習領域を中心とする群、動機づけ（意欲）のメカニズム、人格や社会性の発達等人格心理学的領域を重視する群が見出された。

(3) 現在の勤務校で直面している教育心理学等の専門的支援が必要な児童・生徒の適応上の問題としては、「児童・生徒の問題行動やいじめ・不登校への対応に関わること」や「特別支援及び支援の必要な児童・生徒に関わること」「親・家庭環境に関わること」が、また現在の勤務校で直面している学習指導・学級経営・教員自身の問題としては、特に教員自身のストレスやメンタルヘルスに関わることなどが最も多く挙げられた。スクール・カウンセラー等による支援体制については一部の教育現場では概ね良好に機能していることが窺われたものの、まだ多くの教育現場においては、十分に機能しているとは言えない現状が伺えた。

(4) 学校心理士資格を有する大学教員を対象とした調査では、全体的に見れば発達障害とその対応及び学級集団の問題、コンサルテーション等が重要視されていた。これは、教員・学校心理士のニーズに対応するものである。一方現職教員や学校心理士では、ニーズが比較的に高かった精神医学的知識や心理療法については、大学教員は学校心理学としてはあまり重要視していなかった。

大学教員は相対的に基礎的知識を重視していたが、どのような側面を中心に考えるかには大学教員の捉え方による相違がみられ、伝統的な教育心理学を中心に認知・学習を相対的に重視する群、こうしたテーマを重視せず臨床的な問題を中心とする群、逆に臨床心理学を軽視し相対的に人格心理学的方向性を重視する群などが見出された。これは、現職教員・学校心理士のニーズのありかたと、

ある程度対応していた。また臨床心理重視群では年齢層が40代中心で全体構成からみると、相対的に若い層になっているのに対して、教育心理重視群は、50代中心で、比較的に年齢配層になっている等属性による違いもみられた。

学校心理学の在り方、支援の側面についてみると対象者の多くは、学校心理学が独自の領域として発展することを希求しており、基礎研究を重視する一方、特別支援領域、コンサルテーション等の側面が手薄であるといった見方を示すものが多かった。学校心理学の支援の対象とすべき者や支援内容に関する設問の分析からは、不適応を起こしている児童・生徒個人を対象とすべきという立場や、教職員、あるいは、クラス単位での児童・生徒に対し、進路指導なども含めて支援してゆくべきであるとする立場など、微妙なとらえ方の違いが存することが明らかとなった。

(5) 米国の近年の文献の分析では、特別支援教育、コンサルテーションなど我が国でも一般に学校心理学において重視される領域が同様に重視されている面がある一方、応用行動分析的アプローチ、計量心理学的手法の重視、社会心理学的アプローチなどに特徴がみられた。先にみたように学校心理士の学校心理学の知識構造は、基礎理論によるというより課題中心的であり、基礎的理論づけの重要性が示唆されたが、大学教員は相対的に基礎理論を重視しているものの、それは主に学習・認知面であり、臨床系との乖離がみられた。近年の臨床的諸問題への社会心理学的アプローチの発展を考慮すると、社会心理学的視点により学校心理学を統一的に考察する可能性が示唆される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

1 鎌原雅彦・大芦 治・岩田美保・中澤潤・蘭 千壽・三浦香苗 学校心理士資格を有する大学教員を対象とした学校心理学に関する調査報告 その1—学校心理学のテーマの分析— 千葉大学教育学部紀要 57, 167-173, 2009, 無

2 大芦 治・岩田美保・鎌原雅彦・中澤潤・蘭 千壽・三浦香苗 学校心理士資格を有する大学教員を対象とした学校心理学に関する調査報告 その2—学校心理学の在り方、支援の側面などの分析— 千葉大学

教育学部紀要 57, 79-86, 2009, 無

3 岩田美保・大芦 治____・鎌原雅彦・中澤潤____・蘭 千壽・三浦香苗 現職教員が教育現場で現在直面している問題とスクール・カウンセラーに対するニーズに関する調査報告 千葉大学教育学部紀要 57, 103-108, 2009, 無

4 鎌原雅彦・大芦 治____・岩田美保・中澤潤____・蘭 千壽・三浦香苗 現職教員・学校心理士における学校心理学に関する知識の理解度と有用度の認知 千葉大学教育学部紀要 56, 67-74, 2008, 無

5 岩田美保・大芦 治____・鎌原雅彦・中澤潤____・蘭 千壽・三浦香苗 現職教員・学校心理士が教育現場で直面している問題および学校心理学的知識に関するニーズと情報源 千葉大学教育学部紀要 56, 75-82, 2008, 無

6 大芦 治____・岩田美保・鎌原雅彦・中澤潤____・蘭 千壽・三浦香苗 Journal of School Psychology 誌のキーワードからみた学校心理学の研究動向 千葉大学教育学部紀要 56, 155-162, 2008, 無

〔学会発表〕(計 6 件)

1 岩田美保・大芦 治____・鎌原雅彦・中澤潤____・蘭 千壽・三浦香苗 現職教員・学校心理士を対象とした学校心理学に関する調査報告 (4) —教育心理学等の専門的支援が求められている現職教員が現在直面している諸問題 第 50 回日本教育心理学会, 2008, 東京学芸大学

2 鎌原雅彦・岩田美保・大芦 治____・中澤潤____・蘭 千壽・三浦香苗 現職教員・学校心理士を対象とした学校心理学に関する調査報告 (5) —学校心理士を有する大学教員に対する調査 その1—第 50 回日本教育心理学会, 2008, 東京学芸大学

3 大芦 治____・岩田美保・鎌原雅彦・中澤潤____・蘭 千壽・三浦香苗 現職教員・学校心理士を対象とした学校心理学に関する調査報告 (6) —学校心理士を有する大学教員に対する調査 その2—第 50 回日本教育心理学会, 2008, 東京学芸大学

4 鎌原雅彦・大芦 治____・岩田美保・中澤潤____・蘭 千壽・三浦香苗 現職教員・学校心理士を対象とした学校心理学に関する調査報告 (1) —学校心理学に関する知識の理解度と有用度—第 49 回日本教育心理学

会, 2007, 文教大学

5 岩田美保・大芦 治____・鎌原雅彦・中澤潤____・蘭 千壽・三浦香苗 現職教員・学校心理士を対象とした学校心理学に関する調査報告 (2) —現在直面している問題と学校心理学的知識に関するニーズ—第 49 回日本教育心理学会, 2007, 文教大学

6 大芦 治____・岩田美保・鎌原雅彦・中澤潤____・蘭 千壽・三浦香苗 現職教員・学校心理士を対象とした学校心理学に関する調査報告 (3) —学校心理学に関する知識の情報源とニーズ—第 49 回日本教育心理学会, 2007, 文教大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鎌原 雅彦(KAMBARA MASAHIKO)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号: 90169805

(2) 研究分担者

蘭 千壽(ARARAGI CHITOSHI)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号: 90127960
中澤 潤(NAKAZAWA JUN)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号: 40127676
大芦 治(OASHI OSAMU)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号: 30289235
岩田 美保(IWATA MIHO)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号: 00334160

(3) 連携研究者

三浦 香苗(MIURA KANAE)
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号: 20012560